世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『泣き虫ロッティ』

第5話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第五話〈泣き虫ロッティ〉）

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

ピーター

ロッティ・リー

ラビニア

カートルード

ジェシー

アーメンガード

メイド頭のエンマ

コックのジェームス

警　官

○

ロッティの母、セーラの母

スーザン　ジェニファ　リンダ

ジェイン　ダイアナ　ドルシラ

ペネラピ　クリスティーン

シーザー（猫）　ボナパルト（オウム）

ジャンプ（ポニー）　エメリー（人形）

1

ミンチン女学院の玄関前（朝）

外出姿の女生徒全員が、外套姿のセーラを囲んでざわめいている。

「凄い毛皮ァ」「触らしてェ」「わァ、フワフワ…」

近づいてヒステリックに叫ぶラビニア。

ラビニア「みんな、並んでってば！　叱られるのは私なんだから！」

その時、玄関から石段を眠そうな顔でひとつずつ降りて来るロッティの姿。

気づいたラビニア、駆け寄って怒鳴る。

ラビニア「なにしてんのよ！　ロッティ！　早く並びなさいよ！」

ロッティ「だって、まだ眠いもン」

ラビニア、いきなりロッティの耳を摑んで引立てる。

ロッティ「い、いたいよォ」

はっと見るセーラと、傍のアーメンガード。

ラビニア、耳を離すとロッティを平手打。

ロッティ「うわァん、いたいよォ……」

セーラが駆け寄ってかばう。

セーラ「ラビニア！……ひどいわ、こんな小さな子を叩くなんて」

ラビニア、ジロリと見返す。

ラビニア「セーラ……あなた、私のする事に口を出す気？」

セーラ「だって、ロッティは、まだ四つよ！」

ラビニア「四つだから、どうだって言うの」

セーラ「来年は五つになるし、さ来年は六つになるわ」

セーラ、続ける。

セーラ「そして、十六年たったら、二十歳になるわ」

ラビニア「まあ……計算がお上手なこと」

セーラ、首を振る。

セーラ「ロッティだって、今に物判りの良い子になれるって事よ、叩くなんでいけないわ」

集って来るジェシーとガートルード。

ラビニア、二人と冷笑を交したが、

ラビニア「そんなこと、どうでもいいわ……それより、憶えといて欲しい事があるわ」

ラビニア、威丈高にセーラを見下す。

ラビニア「私はね、この子たちがグズグズしてたら、注意したり、監督したりするように、院長先生に言われてるのよ」

忽ち、ジェシーが口を出す。

ジェシー「そうよ、ラビニアがこの学校の代表生徒だって事、忘れないで」

ガートルードも尻馬に乗る。

ガートルード「ラビニアに口答えするなんて、新入生のくせに生意気よ、ねえ」

凝然とラビニアを見つめるセーラ。

その時、玄関口に、ミンチンとアメリアが出て来るの

が見える。

ジェシー「あ、院長先生よ！」

はっと見るラビニアたち――

ラビニア「シッ、早く列へ……」

生徒たち、一斉に列を作る。セーラも泣きじゃくるロッティを連れて一番前に並ばせると、急いで列の中程のアーメンガードの脇に入る。

玄関の石段上で列を見廻すミンチン。

ミンチン「ラビニア……全員揃いましたね」

列の先頭でラビニアが取りすまし答える。

ラビニア「はい、院長先生……」

ミンチン「では、出発させなさい」

ラビニア「はい、院長先生……」

ラビニアが先頭に立ち、ロッティ以下幼い順に……セーラ、アーメンガード……ジェシー、ガートルードた

ちが二列で出発する。その後について随伴するミンチンとアメリア——

2　揺れ鳴る英国一の大鐘（グレートポール）

3　セント・ポール大寺院全景

正面右の時計塔から、その大鐘の音が響き渡っている。

4　同・表の広場

鳩の舞う広場を — 礼拝に行く人達。
一方から、ラビニアを先頭にしたミンチン女学院の女生徒たちの列が来かかる。

×　　×　　×

足を停めて見る礼拝の人々。

婦人A「ほら、ミンチン女学院の生徒さんたちよ」

婦人B「お上品ねえ……流石、お嬢様学校……」

× × ×

近づく列中のセーラの姿が拡大し……婦人たちの声がかぶる。

婦人Aの声「見て、あのお嬢さん……なんて可愛くて気品があるんでしょう」

婦人Bの声「ほんとに……まるでどこかの国のプリンセス様みたい」

画面をセーラがよぎり、列後部に続くミンチンとアメリアに移る。

得意気に画面（婦人たち）に会釈して通り過ぎるミンチンと、アメリア。

× × × ×

その一行が、入口に入って行く。

5　ミンチン女学院・地下の台所

コックのジェームスと、メイド頭のエンマが料理の支度をしている。

水桶を提げたピーターが入って来る。

ピーター「お早う……水汲まして貰うよ」

途端に、鼻をひくひくさせる。

ピーター「わあ、いい匂いだな。今日のお昼はなんだい」

ジェームス「(ジロリ)お前のは、そこにあるジャガイモだ」

ピーター「ボクのじゃないよ、セーラお嬢様のお食事さ」

ジェームス「スコッチ風羊肉(ひつじ)のスープに、キドニーパイ」

ピーター「へええ、豪盛だなあ」

エンマ「セーラお嬢様が見えてから、食事を張り込むように院長先生に言われてるのさ」

ピーター「なるほどねえ」

手桶を落し、大型の銅鍋に近寄ると、ひょいとスプーンでとり、なめる。

ピーター「ひゃあ、こりゃおいしいや」

ジェームス「(振向いて)こら、なにする」

近づくのにピーター、素早く飛び退る。

ピーター「だって、お嬢様がどんなもの食べるか味見しなきゃ心配だもん。上出来上出来、いい味だよ」

ジェームス「こいつめ………」

6 同・玄関前

列を作って帰って来るラビニアとセーラ以下女生徒たち、立停る。ミンチンはその儘中へ……残ったアメリアが一同に、

アメリア「さ、皆さん、手を洗って。お食事ですよ」

わっと歓声をあげて中へ入る女生徒たち。ロッティは機嫌悪くブラブラと石段を上って入る。残ったセーラ、アーメンガードと顔を見合せたが、続く――

7 同・地下の食堂

ゆっくりと見廻っているミンチンと、一方に立つアメリア
テーブルで、礼儀正しく食事を続ける女生徒たち。

ミンチン「アーメンガード……もっと姿勢を正して……テーブルの上にかがみ込んで食べてはいけません」

セーラの隣りで、前かがみのアーメンガードが慌てて姿勢を起す。
チラリと見て薄笑いの視線を交すラビニア、ガートルード、ジェシーたち。

その時、一方にカチャカチャと金属音。
ミンチン、きっと見る。
一方の幼年組の低い三人テーブルで、食の進まないロッティがナイフとフォークを弄っている。

ミンチン「ロッティ！　ナイフやフォークを玩具にしてはいけません！」

ロッティ、半泣きの上眼づかいで見る。

ロッティ「だ、だって……」

ミンチン「なにが、だってです！」

ロッティ「だって……食べたくないもン……」

ミンチン「なんですって！」

かっとなって近づく。
途端に、堰を切ったように泣き出すロッティ。

ミンチン「まあ……あんたって子は、また泣いてすまそうって言うんですね」

ラビニアたち、顔を見合せて首をすくめる。セーラとアーメンガードは、心配そうに泣き続けるロッティの方を見守る。

ミンチン「よろしい。食べたくないなら、食べなくて結構、あんたのような子は外へ出てらっしゃい」

アメリア「(オズオズ)お姉様……」

ミンチン「いいえ、こういう子は厳しくしつけないとクセになります。さ、出てなさい」

強引にロッティを椅子から引立てると、ドアへ——

心配気に見送るセーラ。

8

同・ドアの外

ドアが開き、ミンチンがロッティを放り出すと、バタンとドアを閉める。

しゃくり上げるロッティ。

9 同・地下の階段附近

しゃくりながら来るロッティ――切れ切れに嗚咽の声が洩れる。

ロッティ「……おうちへ……かえりたいよォ」

その儘、階段へ――

開いた儘の台所のドアから、エンマが出て来ると、階段上に消えるロッティを怪訝に見送る。

一瞬、一方へとって返すエンマ――

10 同・地下の食堂

ドアが開き、慌ただしく入って来るエンマ。

エンマ「院長先生……！」
ジロリと振返るミンチンに、エンマが駆け寄ると、何事か囁く。一瞬、ミンチンの顔色が変わる。
ミンチン「なんですって、ロッティが？」
その声に、はっと見るセーラ、アーメンガードたち。
エンマ「は、はい……うちへ帰りたいとか……」
ミンチン、近づいたアメリアに、
ミンチン「アメリア……！」
アメリア「はい……」
ミンチン、アメリア、エンマ、急いで出て行く。
見送って心配そうに立上るセーラ。

11 同・二階の廊下

足早に来るミンチン、アメリア、エンマ、一室のドア

を開ける。

12 同・ロッティたちの部屋

入ったミンチンたち、見廻す。
ロッティのいない無人の部屋――

13 同・二階の廊下

上って来るセーラ――その後ろに野次馬的に来るガートルード、ジェシーたち。
ロッティの部屋からミンチンたちが出てくる。

アメリア「矢っ張り、ロッティは表へ……」
ミンチン「手分けして連れ戻すんです!」
アメリア「はい……」

アメリアとエンマ、セーラたちを分けて階段へ――
ミンチン、セーラたちに近づく。
ミンチン「なにをしてるんです。あなた方は戻ってなさい！」
ぱっと逃げるガートルードたち。
セーラ一人、前に出る。
セーラ「院長先生……私にも、ロッティを探させて下さい！」
ミンチン「なんですって？」
セーラ「私、ロッティの事が心配なんです……あの子を探してあげたいんです」
ミンチン「そう……あなたには、馬車がありましたね」
セーラ「は？」
ミンチン「許します……但し、一時間後には必ず報せに戻っていらっしゃい」
セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン、足早に階段を降りて行く。

見送ったセーラ、急いであとを追う。

14

同・馬車置場の外

ピーターが手桶の水で、ポニーを洗っている。

駆け込んで来るセーラ

セーラ「ピーター……！」

ピーター「やあ、お嬢様……」

セーラ「大変、ロッティがいなくなったのよ」

ピーター「なんですって」

セーラ「お願い、一緒に馬車で探して」

ピーター「判りました、お嬢様……」

15

同・表

16 道

走り出るセーラを乗せたポニーの馬車。

17 走る馬車の上

走り抜ける馬車

身を乗り出すように、左右の道際を探すセーラ、ピーターに呼ぶ。

セーラ「ピーター、お願い……駅の方へ行ってみて」

ピーター「判りました、お嬢様」

18 ある駅の構内

ポウッ……と汽笛を鳴らして機関車が列車を曳いて発車する。

19 同・駅前

走り込んで来るピーターの馬車 ― 停って、セーラが飛び降りる。続いてピーター。二人、見廻す。
一方に、立っている制服警官の姿。
二人、急いで警官に駆け寄る。

セーラ「あの、ここへ四つ位の女の子が来なかったでしょうか」
警官「女の子？」
ピーター「ええ、名前は、ええと……」
セーラ「ロッティって言うんです」
警官「さあて。本官はずっとここに立っておったが、そんな子供は見かけんかったね」

茫然と顔を見合わせるセーラとピーター。
ポウッ……と、遠去る汽笛。

（中ＣＭ）

20 ミンチン女学院・院長室

窓辺で、焦々と行きつ戻りつしているミンチン——その前に、アメリアが帰って来ている。

アメリア「あの子の足で、そう遠くへ行ける筈がないと、あちこち探したのですけど、とうとう何処にも……申訳けございません」

ふと足を停めるミンチン……

ミンチン「あの子の親許は、確か、ポーツマスでしたね」

はっとなるアメリア——

アメリア「矢張り汽車に潜り込んで……」

その時、表に馬車の音 − 窓外を見て、

アメリア「あ、セーラさんですわ」

21 同・表

停るポニーの馬車

セーラ「ありがと、ピーター……とにかく院長先生に連絡して来るわ」

降りようと座席を立ったセーラ、公園の方を見て、愕然となる。

セーラ「ロッティ……！」

叫びざま公園側に飛び降り、走る。

ピーター「（驚く）お嬢様！」

咄嗟に馬車を飛び降り、追う。

22 同・院長室

茫然と窓外を見たミンチンとアメリア、顔を見合わすや、ドアへ走る ——

23 前の広場の公園

駆け込んで来るセーラと、追って来るピーター、思わず立尽す。

× × ×

立木の根方で —— 両脚を投げ出したロッティが、ヒクッヒクッと泣きじゃくっている。

× × ×

顔を見合せたセーラとピーター、そっと近づく。

セーラ「（優しく）ロッティ……」

ロッティ、泣きはらした眼で、茫然とセーラを見上げる。

セーラ「（微笑）さ、みんなが心配しているわ、学校へ帰りましょう」

突然、ロッティ、激しく泣き出す。

その時、大股に近づいて来るミンチンとアメリア。

ミンチン「まあ……ずっとこんな所に隠れていたのね、人騒がせをして」

ミンチンを見たロッティ、更に激しく泣く――

ミンチン「さ、いらっしゃい！」

いきなりロッティを横抱きに抱えると、とって返す。

セーラ「院長先生！」

アメリア「お姉様！」

アメリア、急いで追う。

茫然と見送ったセーラ、ピーターと顔を見合せると、

追う

24 ミンチン女学院・遊戯室の前の廊下

そっとドアに近づくセーラ。
中からロッティの泣き叫ぶ声が聞こえる。

25 同・遊戯室

一角で、床に転がって泣きわめくロッティ。傍に見おろすミンチンとアメリア。
ミンチン「ロッティ！……なんだってそんなに泣かなきゃいけないんです！」
ロッティ「だって……だって、私…… ママがいないんだもン……」
アメリア「ロッティ、もう泣くのはやめて……いい子だから泣かな

いで頂戴……」

ロッティ「私……いい子じゃないもン……ママがいないもン……」

ミンチン「全く手がつけられない子ね。アメリア、こういう子は、鞭を与えなければ……」

アメリア「でも、お姉様……」

ミンチン「そう……じゃ、あなたが責任を持ってしつけなさい」

アメリア「お姉様……」

ミンチン、出て行く。

26 同・前の廊下

出たミンチン、ふっと立停る。

前に、心配そうに立っているセーラ。

セーラ「院長先生……」

ミンチン「なにをしているのです。こんな所で……」

セーラ「私……ロッティとお話してみたいんです」

ミンチン「なんですって？」

セーラ「私……ロッティのお友達になってあげたいんです」

ミンチン「まあ……あんな判らず屋の、泣き虫の、かんしゃく持ちの、それから……」

セーラ「お許し頂けるでしょうか」

ミンチン、ふっと吐息する。

ミンチン「ま、それが出来るならね……あなたはお利巧さんだから、出来るかも知れなくてよ」

言い捨てると、院長室へ入って行く。

ほっと見送るセーラ。

27 同・遊戯室

仰向けに転がって泣きわめくロッティの傍で、膝をつ

いたアメリアがおろおろとなだめている。

アメリア「ロッティ……もう泣くのはやめて……私を困らせないで頂戴……お願いよ」

ドアが開き、セーラがそっと入る。

振り返ったアメリア、急いで立つと傍に駆け寄る。

アメリア「セーラさん……」

セーラ「アメリア先生……院長先生が、私にロッティと話す事をお許し下さったんです」

アメリア「まあ……」

セーラ、ロッティの方を窺うと、

セーラ「あの……ロッティと二人だけにして頂けるでしょうか」

アメリア「(ほっとして)ええ、勿論いいですとも……あなたなら、なんとかなだめられるかも知れないわ……じゃ、セーラさん、お願いね」

役逃れのように出て行く。

見送ったセーラ、ロッティの方を見る。
坐り込んで顔に手をあて、泣きじゃくっているロッティ。
セーラ、そっと近づく。

セーラ「（優しく）ロッティ……私よ……」

顔に手をあてた儘、ロッティがもぞもぞと首を廻す
あてた指をそっとずらし、その間から涙の眼が見上げる。
微笑で立っているセーラ
ロッティ、急に顔を覆うと激しく号泣する

ロッティ「あたし、ママがいないもン……ママが死んだもン……」

セーラ、そっとロッティの脇に坐る。

セーラ「ロッティ……私も、ママがいないのよ」

ビクッとロッティの泣きがとまる。
覆っていた手が、そろそろと下にさがり、セーラに顔

を向ける。

涙の眼が、驚いたように、またたく――

ロッティ「ほ、ほんと……？」

セーラ、深く頷いてみせる。

ロッティ「ほんとに……セーラにも、ママがいないの？」

セーラ、優しく頷く。

セーラ「そうよ……丁度、私が、あなたと同じ四つの時、召されて天国へいらしたのよ」

ロッティ「天国に……？」

セーラ「ええ……天国で、私の事をじっと見守っていて下さってるの……だから、私の事は、なんでも知ってて下さるのよ」

ロッティ「私のママは……？」

セーラ「あなたのママも同じよ……天国で、きっとあなたの事を見守っていて下さるわ」

ロッティ「セーラ……ママの事、憶えているの？」

セーラ「（微笑で頷く）ええ、沢山……」
ロッティ「どんなママだったの？」
セーラ「優しくて、素晴らしいママだったわ……そうだわ、私の部屋へ来れば、逢わせてあげられるわ」
ロッティ「ほんと……」
セーラ「ええ……さ、行きましょう」
セーラ、ロッティに手を伸べる。
ロッティ「うん……」
セーラの手をとって立上がる。

28 同・表の廊下

ドア前で、聞き耳を立てていたミンチンとアメリアが、気配に急いで左右に身を退く——
ドアが開き、ロッティの手を曳いたセーラが出て来る

と、ミンチンとアメリアに気づかずに、階段口の方へ去る——
再び左右から現われて、セーラたちを見送るミンチンとアメリア、茫然と顔を見合せる。
その足許から、シーザーがのっそりとセーラたちのあとを尾けて行く。

29

同・二階の廊下

集ってヒソヒソ話しているラビニアたち。
階段を駆け上って来るガートルード。
ガートルード「シッ、来るわよ!」
ラビニアたち、一斉に部屋に走り込む。
階段を、ロッティの手を曳いて上って来るセーラ
三階へ。

そのあとから、尾いて行くシーザー。

×

各部屋のドアが開き、一斉にセーラを見送るラビニアたち。

30 同・セーラの部屋の前

階段を上って来るセーラとロッティ。

セーラ「さ、ここよ」

セーラ、ロッティを連れて、ドアを開け、入る　尾いて来たシーザー、閉まるドアに鼻先をバチン。

31 同・セーラの部屋

入って来たセーラ、暖炉の上から、父母の銀版写真を

取るとロッティに見せる。

セーラ「さ、私のママよ」

じっとみつめたロッティ、泣き顔になる。

ロッティ「私、ママを憶えてないもん……写真だってないもん」

セーラ、慌てて写真を戻すと、ロッティの前に坐る。

セーラ「じゃ、ロッティ、こうしましょう」

ロッティ、怪訝にセーラを見る。

セーラ「あのね……この学校にいる間は、私がロッティのママになってあげるの」

ロッティ「セーラが、私のママになってくれるの?」

セーラ「そうよ……」

ロッティ「ほんとに?」

セーラ、微笑で深く頷く。

ロッティ「わあ、嬉しい……」

ふと、安楽椅子のエミリーに気がつく。

ロッティ「あ、お人形がある！」
セーラ「エミリーよ……私、エミリーのママでもあるの」
ロッティ「え、このお人形のママなの？」
セーラ「そうよ……だから、ロッティは、エミリーのお姉さんにな
　ったのよ」
ロッティ「わあ、お姉さんだ……ね、抱いてあげてもいい？」
セーラ「ええ……さ、ロッティお姉ちゃまよ」
　エミリーをロッティに渡す。
ロッティ「わあ、可愛い……」
　抱きしめるロッティ。セーラ、微笑。
　一方で、ボナパルトが叫ぶ。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」

32 同・セーラの寝室（夜）

ベッドに掛けたロッティの髪を櫛でとかしてやるセーラ。

セーラ「さ、今夜はママが一緒に寝てあげますからね。でも、明日からは、ちゃんと一人でお寝みするのよ」

ロッティ「うん、ママ……私、もう泣いたりしないもん……セーラママがいるもん」

セーラ「（微笑）そうね、ロッティ」

／　　　／　　　／

ベッドに、エミリーと並んで眠っているロッティ。

微笑でみつめているセーラ。

セーラのN「ロッティは、とても素直ないい子です……でも、私に、四つになる女の子が出来たと聞いたら、きっとお父様はびっくりなさるでしょう……それとも吹き出してしまいになるかしら……」

（第五話　終）